

～育む～

# 8

## 21世紀に求められる都市照明のあり方



面出 薫  
MENDE Kaoru

株式会社ライティングプランナーズ アソシエーツ/代表取締役  
照明デザイナー、武蔵野美術大学教授

都市の中で活動する人々のために“あかり”があった。都市の成熟と共に変わり行く“あかり”があり、時代とともに求められてきた“あかり”があった。都市照明はその時々において徐々に変貌してきたのではないだろうか。そして新たな時代の“あかり”がもたらす役割とその変貌とは……。

### 序論

21世紀に求められる都市照明の役割は、前世紀に求められた役割を大胆に刷新するものとなるだろう。照明に対する市民の価値観が大きく転換し、20世紀的な照明デザインのあり方やその目的自体が大きく転換するに違いないからだ。これまでの都市照明の役割を考察すると「安全な都市づくり」と「美しい都市づくり」の二つの指標に基づいてきたことが判明する。

20世紀に私たちは、夜に暗くなるべき都市空間を莫大なエネルギーを浪費し、ひたすら明るくすることに勤しんできた。太陽が沈んだ後にも昼のように白く均一に明るい都市空間を希求し、間違いなく文明の進歩とは24時間眠ることなく活動を続ける都市を目指してきた。そこでは「安全な都市」が照明の最優先の課題であり役割であった。どのようにしたら都市は夜間に安全を確保できるのか。特に照明は夜間の交通と、防犯という二つの安全に対して、その役割を問われてきた。

そして、その安全な都市づくりという役割が徐々に浸透し達成されてくると、都市照明に求められるものは「権威の象徴」として闇にそびえる巨大建築を演出したり、多くの観光客の度肝を抜くための美しい光のオブジェをつくることに向いていった。ヨーロッパの諸都市で橋梁などの土木構造物や歴史的建造物に気の利いたライトアップを行い、たくさんの観光客を集めることに成功すると、次なる照明デザインの役割は「美しい都市づくり」へと徐々に拡大した。夜には昼にないもう一つの都市景観が求められ、



写真1 パリの夜景

美しい夜の絵葉書づくりがたくさんの観光客を呼び、都市の魅力の一つとして認められてきた。人々は夜に美しい街を好み、そこに住む市民は美しい景観を誇りに思うようになる。シティ・ビューティフィケーションという言葉が台頭して、夜景の質が語られ夜の街並みが整っていくことは大いに歓迎されるべきである。

しかし、それらの都市照明の役割が認識された後に、私たちには今、さらに洗練し新時代を迎えている。安全性や美しさという点とは異なる都市照明の新たな役割とは何か。私はそこに3段階の指標を提案したい。すなわち、「快適な光環境に満たされた都市」、「個性的で文化的な光を表現する都市」、そして「環境や人に優しい光の都市」である。

過去から現在、そして未来に対して都市照明がどのような役割と使命を担っているかを論説する。

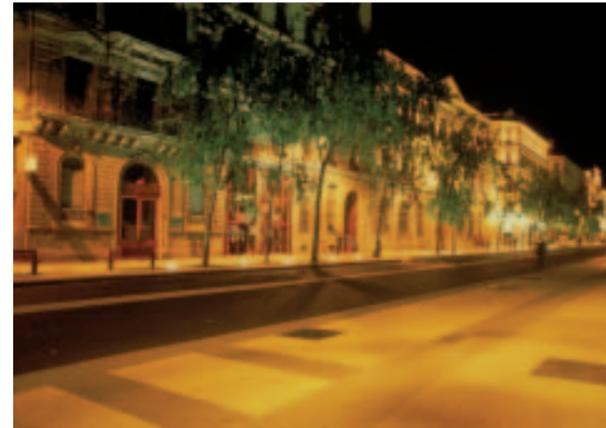


写真2 リヨンの夜景



写真3 ニューヨークの夜景

### 安全な都市のための光

電灯（アーク灯）が街路灯として使われたのが1870年代であるが、それより以前には少しのガス灯の時代、更にはその前にはランタンやローソクが街路灯照明に使われていた。その意味では既にパリに灯火による街路灯が出現した17世紀には、都市の安全を確保する役割で照明は使われ始めたわけである。わずかな光の炎による街路灯でさえ、夜の圧倒的な闇の中であって防犯の役割を果たしたことはよく理解できるが、犯罪を撲滅するには至らない。現在でさえ街角を煌々と明るく照らし出すことが犯罪をなくす最優先課題のように主張する向きもあるが、私はそれに同意しない。マンハッタンに犯罪の多発した時期でさえ、あるアベニューが明るくなり犯罪件数が減少すると、隣のアベニューの件数が増えるのみで、犯罪の中核は照明では撲滅されたためしがない。もちろん昼より夜に都市環境での犯罪が多発することは誰もが知っている。しかしそれを理由に都市の夜を昼のように煌々と照らし続けようというのは短絡した論理ではないだろうか。また昨今では、青色の光の防犯効果が高いという主張をよく耳にするが、根拠の薄い理屈を持って大切な都市の公共空間が青色光に支配されてしまうのは愚行ではないかと考える。私は照明デザイナーとして青色の光を大切にしているが、隠し味のように使用する事はあっても広範な公共空間に使うことはない。色の見え方の悪さや発光効率の低さゆえに勧められない。

これからの防犯照明は光の量だけではなく、人間の視認性や心理的効果を駆使した次元へと移行していくはずである。路面が明るく煌々と照らされていなくても防犯効果の期待できる照明手法や街並みのシステムを模索すべきだと考える。

そのような光の量から質に転換した照明手法の開

発は、交通の安全性確保に対しても適応される。すなわち、これまでの道路灯の設置基準は交通量に応じて路面を明るくそして均一に照射することが義務付けられているわけであるが、将来的には車輻照の発達やセンシング技術の発達などによって道路灯の不要な時代が訪れるはずだ。路面にたっぷりの光を与えてさえいれば安全という考えは前時代的になりつつある。ドライバーと歩行者それぞれの目線に立って、歩行や運転の安全性を再点検すべき時期にさしかかっている。時代の新光源であるLEDや有機ELの利用はそれに拍車をかけるに違いない。

### 美しい都市づくりのための光

美しい都市は万人の願いである。時代が静止したかのような欧州の古い都市を訪れるたびに街並みの美しさに感激し、わが日本に見る大都市の混沌とした景観との落差を嘆いてきた。しかし都市景観は昼と夜との二つの姿を持っている。昼に煌々と隠しようもなく照らし出される都市の姿も、夜になれば適度な闇にまぎれて視覚から遠のくこともあり、夜の人工照明の下では意図した都市景観を創造できるという側面を持っている。それだけに「夜に美しい街並み」は現実的な努力が報われる実効性の高いデザインテーマでもあるわけだ。

パリやリヨンという照明先進的な都市は光の観光化粧に成功している。明らかに彼らは夜の街並みを美しく整えることで多くの観光客を集め、ビジネスとしての成功を取っている。そこには光を受けて美しく輝くべきオブジェクトとしての建築や橋梁などが数多あり、巧みな光の演出によって劇的な表情をつくり上げている。そこでは都市照明はさながらプロセニウム・ステージ上で練り広げられる舞台照



写真4 上海の夜景



写真5 東京の夜景

明のようなもので、かなり演劇的、演出的な効果を持っている。だから欧州のライトアップの技術や手法をそのまま日本に輸入しても、欧州的オブジェクトに恵まれない限りはキッチュなものになりかねない。日本には日本の都市らしい「たたずまい」というものがあって、単独のアイコン的なオブジェクトに頼らない夜の都市景観があるのではないだろうか。ライトアップという和製英語が流行して久しいが、わたしは美しい日本の都市景観をつくる独自の方法論を開発したいと思っている。もちろん日本の都市景観はまだまだ開発途上であり、なすべきことが山積みされている。これもまた「明るく照らし出せ」という話ではなく、光と陰影を絵の具として街の個性的な景観を丁寧に発掘する作業なのである。

### 快適な光環境に満たされた都市

前述した「安全な都市」と「美しい都市」という課題は、ほぼ世界中の先進都市にとって等しく認識されている。しかしここから新しい命題に入るわけで、第一に問題提起したいのが「快適な都市」である。安全で美しい都市が人々に快適であるかどうかはわからない。快適とは時に安全や美観をも包含する概念ではあるが、何が快適な光であり何が不快な光なのかを明確に認識すべきである。これは甚だ難解な質問である。この光に関する快適性には未だたくさんの方の見方や議論があるので、一概に強引な結論を強要するわけには行かないが、見方を単純にするために生理的、心理的に不快な光の現象を探ってみることにしよう。

まずは「まぶしい光」が挙げられる。これは美しい都市として知られるパリやリヨンでさえ撲滅されていない。時々ケアレミスのように街中にまぶしい光が放置されている。日本の都市においては最悪

で、私たちの目を眩ます街路灯や投光器などが野放し状態になっている。この突出した輝度を放つ照明器具の氾濫は光の品質に対する無知がなせる業で、コンビニエンスストアのむき出しの蛍光灯と同様の原理で、ギラギラとまぶしいだけの光源輝度は逆に周囲の環境にあるものをシルエット的に見せてしまい、環境の明るさ感を与えるには逆効果なのである。まぶしい光を取り除くと目に優しく快適な視環境になることが理解されていないのだ。実験をしてみると良い。ランプ丸出しの道路灯に出くわした時には帽子のつばか自分の手をかざして、そのグレアを視野からはずしてみよう。そうすると目がとても楽になるだけではなく道路灯の周囲の環境が一層明るく明確に見えてくるはずだ。グレアのある環境がいかに空間に悪影響を与えているかを身をもって知っている人が少なすぎる。これが大問題なのである。

他の不快な光の例としては「明るすぎる環境」もある。時に暗すぎる環境も不快になるのだけれど、日本の都市には必要以上に明るすぎる環境が多い。道路や公園などのいわゆる屋外公共空間では夜に1~5ルクスという低い照度で十分な明るさを感じることができる。人間の目が夜に馴染んでくるからだ。必要以上の照度も不快なのである。「白い光が夜の生活空間を支配するという現象」または、「水平面にみに光が溜まっているという現象」、さらに商業サインなどに見られる「極彩色のケバケバしい光」や「すばやく動き回る光」が多いのも不快な光の現象と考えられる。不快な光の反対の現象がそれぞれ快適な光のルールである。

### 環境や人に優しい都市照明

次に話題にすべきなのは環境や人に優しい都市照明という視点である。経済発展する20世紀には



図1 「シンガポール中心市街地照明マスタープラン策定業務」で計画した20~30年後に出現するシンガポールの夜景

地球環境を破壊し人間の健康を阻害しながら照明に期待してきた事実があるのだから、これは明確に都市照明を高度に発展させるための基本条件として捉えなければ成立しないものであろう。平易に言えばエネルギーを最大限に注意深く利用する工夫であり、わずかな光を愛おしく都市の中にデザインしていく姿勢である。

環境に優しい照明というとすぐに高効率で長寿命、そしてCO<sub>2</sub>を出さない光源の利用だけが叫ばれる傾向にあるが、短絡した技術論ではなく、都市照明デザイン上の多くの知恵を絞って解決しなければならないことである。

環境に優しいという視点では明るくしすぎている無駄な都市照明を取り除く必要がある。私たちは照明探偵団という光の文化研究会で街並みの小さなライトアップ実験をすることがあるが、都会の街角が明るすぎて、きれいな陰影を観ることができないことを嘆いている。街角のライトアップをしようとするとう路灯の不要なあかりをまず消すことから始めなければならない。現在私たちの周囲には必要以上の光の量が溢れていて光の過食症状があると認識すべきだ。

さらにクリーンな電力の利用は将来的に不可欠だ。風とか太陽とかのエネルギーだけで都市照明がまかなえないものだろうか。クリーンエネルギーによる少ない光を十分な光の量に昇華させることが急務だと考える。

人に優しい照明というのは、もっと繊細な照明理論に触れる話であるが、原則は「安らぎの光」「リラクゼーションの光」を追い求める姿勢である。少ない光の刺激量に敏感に反応する機能を人間側に回復しなければならない。闇をも恐れず電気のなかった時代の生活感覚を取り戻すことがエコロジーに

繋がるのである。コペンハーゲン、ストックホルム、オスロ、ヘルシンキ、というような北欧の代表的な都市に1ヶ月ほど住んでみるといいのではないか。彼らの日々の生活は私たちのように明るくない。そこに行くくと光の断食道場に入ったかのような感覚に陥るはずだ。どちらが人間に優しい環境かは、はっきり自覚できるはずである。

### 個性的で文化的な都市を目指す光

最後に思い当たる都市照明の役割は多分に恣意的でもある。私は世界中の夜景や都市照明がスターバックスやマクドナルドのようなグローバルイゼーションの波に飲み込まれて、それぞれの個性を失い同一化して行くことは文化的な損失だと考えている。世界に同じ都市などひとつもない。東京の夜景がパリに比較して統一感もなく猥雑であると批判しても、それはもちろんのことであり、パリが圧倒的に優れているという結論には合意できない。東京には東京にしかない歴史や文脈や生き様があり、課題はたくさんあり、パリより美しいとは言えないけれどもパリには真似できないカオスやダイナミクスがある。それが固有の東京の姿であり光文化でもある。ニューヨークもバンコクも大阪も上海も、イスタンブールもムンバイもシンガポールも。私の旅したそれぞれの街には異なる人々の価値観と異なる都市の形、そして特有の光環境が存在している。

であるから世界中の都市の夜景や都市照明は光の量が多かるうが少なかるうが、街が夜の観光に成功していようがまいが、単純に優劣をつけるわけには行かない。個性が大切にされるべきなのだ。考える。世界中には未だ電力供給の行き渡らない都市もあるが、都市照明が否応なしに進化していく過程で大切なことは、都市照明の実態はそれぞれの国や人々の個性的で文化的な営みの反映であるべきだ、ということである。

それぞれの民族や土地には太古より培ってきた歴史や地形や気候風土による固有の光文化があるはずだ。単純に言うと、そこに住む人たちがどんな光を愛おしいと感じているかである。その光文化とはもとより自然光と都市形成の中で培ってきたものだ。地球上の多様な都市が光の多様性をも純粋培養することを切望している。一方照明デザイナーとしての私自身も、様々な都市を旅するのみでなく、個性ある都市照明のデザインに関わりたいと思っている。